

舞姫

恋の瞬き い落ちる

早瀬響子

Illustration
甲田イリヤ





舞い落ちる恋の瞬き

《立読み版》

早瀬 響子

イラスト 甲田 イリヤ

「何……?」

初めて彼に会った時、高木晃たかぎあきらは思わず食い入るようにその顔を見つめてしまっていた。

——なんて、綺麗なんだ……!——

ごく自然に感嘆の想いがこみ上げ、それからひどく当惑した。男に対して自分がそんな感情を持ったことなど、これまで一度もなかったからだ。

「……失礼いたします。A新聞社の高木様はこちらでしょうか」

最初に、優しい声が障子の向こうからかけられた時、実は晃はひどく不機嫌だったのだ。雪見障子の真ん中にはガラスの窓がはめ込まれていたが、ちょうど相手の姿は見えなかった。

——冗談じゃあねえぞ、日舞の御曹司だかなんだか知らないが、そんな全然畑違いの、わけのわからないものやってる奴のことなんか取材できるか!——

数日前、いきなりこの仕事を命じられて以来、晃はすでに何十回ついたかわからない悪態を心の中でまた繰り返していたのだった。

それは、晃が新しい職場に移ってから任された最初の本格的な取材だった。晃は昨年から、A新聞社の、写真中心の月刊誌を出している部署に所属していたのだ。

相手は日舞の中でも最近、特に勢力を増してきている一派、白鷺流宗家の一人息子だという。邦楽界でも、その才能と名を知られたのは最近になってからだそうだが、半年ほど前に某国営放送のドラマに小さな役で出たのが好評で、急に一般にも注目されるようになったらしい。現在、A新聞社の系列であるAテレビが、彼にいくつかドラマ出演の話を持ちかけているそうで、そこからこの取材の話が晃に來たのだった。

けれど、この部署に移動するまでずっと報道写真一筋のカメラマンだった晃は、そんな世界の人間なご、興味どころか考えたことすらなかった。むしろその経歴に、少しばかり気色悪いとさえ感じていたのだ。

やむを得ず、約束の二月末の今日、どんよりと曇った寒い午後、目黒めぐろにある彼の屋敷に出向いたが、出迎えた案内役の男は、こちらを見てひどくうさくさそうな顔をした。

自分でもよくわかっているが、あまり愛想がいいとはいえない顔立ちである。面長で顎の張った輪郭に太い眉、それに切れ長なつり上がり気味の瞳が、相手にやや強面な印象を与えてしまう。おまけに大

柄がちりとした身体で、撮影のために動きやすいよう、シャツに黒の革のジャケット、それにコーデュロイのパンツという格好だったので、なおさらだった。

事前に連絡はしていたが、社に確認の電話をされた後、ようやく通してもらえた屋敷は広大で重厚な日本家屋だった。男の案内で、撮影用の重い機材を抱えて長い廊下を歩かされ、奥の座敷にたどり着いた時には、晃はもう、すっかりうんざりしていたのである。おまけに慣れない正座をしていたため、身体のあちこちが強張っていた。

「……はあ」

つい、返事も無愛想になってしまい、そんな自分に顔をしかめる。

と、その時、ほとんど音もなく障子が開いた。そこに彼が座っていたのだ。

「お寒い中、ようこそおいでくださいました。鷺村雅哉（あづまのまひや）でございます」

言いながら、彼——雅哉は、手をつけて丁寧にお辞儀をした。

一目見たとたん、晃は息を呑んだ。そして彼がもう一度顔を上げた時には、全く身動きができなくなってしまうのである。

黒曜石のように美しく大きな瞳が、目に飛び込んできた。少しためらうような様子で、だがかすかに

笑みを浮かべて、じつとこちらを見つめている。

その瞳と高く通った細い鼻梁、そして形のよい薄い唇が、小さな卵形の輪郭の中に見事に配分され、端正で優しい面差しを形づくっている。髪は漆黒でさらさらとしていて、軽く後ろに流していた。体つきはほっそりとして、肌の色は抜けるように白い。それが着ているやや灰色がかった淡い青の着物によく映え、清潔な印象がある。

自分より七歳年下と聞いていたから、今年で十八になるはずだが、その姿と言葉遣いのためか、かなり大人びて見えた。こんなに美しい男を見はこれまで見たことがなかった。

「あの……？」

※続きは製品版でお楽しみ下さい。

舞い落ちる恋の瞬き

《立読み版》

発行日 2011年9月1日

著者名 早瀬 響子

イラスト 甲田 イリヤ

発行所 【MILK-CROWN】

株式会社水晶院

<http://www.milk-crown.net/>

(C) Kyoko Hayase 2011

※本著作物の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。